

二〇〇〇年度 夏季展

初世中村蘭台・二世蘭台・淳
—三代の篆刻—

富岡美術館

二〇〇〇年度 夏季展

初世・中村蘭台・二世・蘭台・淳一・三代の篆刻

平成二二年六月二三日―七月三〇日

発行 財団法人 富岡美術館

〒183 東京都大田区山王二―1313

TEL・FAX 〇三(三七七)一〇五四

制作 株式会社 大塚巧藝社

〒108 東京都中央区日本橋小網町一―五

TEL 〇三(五六四)二三五一

二〇〇〇年度 夏季展

初世中村蘭台・二世蘭台・淳

三代の家刻

江苏工业学院图书馆
藏书章

富岡美術館

ごあいさつ

このたび富岡美術館では、平成一二年度夏季展として〈初世中村蘭台・二世蘭台・淳——三代の篆刻——〉を開催いたします。この展覧会は、明治以降の日本篆刻界をリードし、大きな影響を与え続けてきた中村家三代の業績を篆刻・書画・工芸品一四一点で顧みるものです。

当館では、平成三年に初世蘭台の特集展示を、また平成七年には二世蘭台の「老子語印五十顆」を特別展示いたしました。これらを受けて、今回三世中村淳氏の作品を加え、中村家三代の作品がはじめて一堂に会する展覧会へと結実いたしました。

初世中村蘭台（一八五六―一九一五）は、徐三庚など中国印人の篆法を取り入れて、独自の作風をつくり、近代的な篆刻を完成させました。河井荃廬と並び称され、その後の日本篆刻を方向づけたとされます。二世蘭台（一八九二―一九六九）は、初世蘭台の次男として生まれ、父が病に倒れたことから本格的に篆刻を始めました。二世蘭台の、篆刻の概念を打ち破るような斬新で装飾的な作風は、自刻の鈕とともにいまなお魅力的です。三世にあたる中村淳氏は、大正十年二世蘭台の長男として東京に生まれました。中村家伝統の感覚的、かつ骨太の作風は近年ますます融通無碍となり、圧倒的な力を感ぜさせます。この中村家三代の一二〇年にわたる篆刻の歴史は、そのまま日本篆刻史の一面でもあります。篆刻史を概観するとともに芸術家として三者三様に到達した境地・刻風をお楽しみください。なお本展を開催するにあたり、東京の中村家には、全面的なご協力をいただきました。

心より御礼申し上げます。

平成一二年六月

財団法人 富岡美術館

中村家三代の篆刻について

中村 淳

はじめに

「三代」(三世) 展覧会の話は、去年の秋頃、富岡美術館の学芸員が突然話を持ってきた。三代とは、初世中村蘭台、二世中村蘭台、私「淳」との三人の展覧会のことであった。どの様な考へで三人展を考へたのだろうか。学芸員の話によると、私の喜寿を祝つて作つた『邨淳印譜 二集』を見て思いついたのだという。

五年前に富岡美術館で「二世中村蘭台の篆刻―老子語印五〇顆を中心に―」の展覧会が開かれて、大変評判が良く、相当数の観客が入った。その時は二世蘭台の「老子語印」五〇顆を展覧したのは初めてであり、それに二世蘭台の印はもともと評判が良く観客層が多く、「老子語印」全部を鑑賞する機会を得たので入場者が有った。

初世蘭台は明治大正に活躍した大家であるから当然、観客が多い。以前に、富岡美術館で開催された初世蘭台の展覧会は記憶がある。私が入った展覧会は、今度初めてであり、初世・二世と列べて見て、どんな感じになるだろうか。初世・二世の木工芸品と篆刻と、私の石印材(切り石で何もない印材)と比較し、眺められたら観客はどの様に考へると思う。三代の篆刻展観とは珍しいと考へるけれども、私自身は、祖父・父と列べられてみて、とても見られるものではない作品ばかりで、俗に「月にすっぽん」の喩への様で、困ったものである。

祖父・父の事は富岡美術館では展観し、既に記事は書いたから、余り書く必要はないが、一応書いておきたい。

初世中村蘭台

〈初世中村蘭台(一八五六―一九一五)は、福島県会津の生まれ。幼年父を失ひ、男三人の内、末子として母に連れ出され、東京へ来り始め、浅草馬道の金物屋に連れ子として入籍、後に柳橋の「つち屋」という船宿に貰れて、中村稻吉を名のるに至った。(書道帳「蘭台と寒山」より)〉

この記事は鹿兒島二橋氏の論説で、この方が聞いて書いたのか、不明である。二橋氏は後で述べる様に、二世蘭台が萬華鏡社の画会を開いたメンバーの一人である。この記

事は大分真実に近い様である。これには他の事も面白いことが書いてあるが、今は止めることにする。

初世蘭台の仕事は、木額、線香入れ、筆立、印泥盒、篆刻、その他生活用具の一部として、趣味的に便へる物品を作成し、その作品に篆書体、埤などの文字を工芸的に入れデザインをして、その物体に絵の具・金箔などを使って美しく見せた。今回は、印泥盒、線香入れ(Ⅰ―25)などを陳列した。日記などにはもつと広範囲に物を作っていることが記されている。私の家には、火鉢の外側を作っているのが残っている。小さい物で、木製で丸い形をしており、四方に篆書体を刻している。大きさは直径三〇センチ位かもしれない。手焙風のものである。篆刻なども陳列を見れば、木製が多い。篆刻は本来、石印材が多いが、初世蘭台は木印が多い様である。木の印材の鈕を刻し、その鈕は獅子でなく、瓦、銭、鳥、魚などを刻している。中国から当来してきた金石文などを模して、それを印材の側款などに刻し、木印を染料で染め、また漆を塗り、彩色金箔をほどこして美しくしている。今回出品している大印「天保九如」の印「壽與山齊福隨春至」(Ⅰ―7)は松の木らしいが、白檀を自称し箱を作つて格式を付けて、注文者に持参している。それと一緒に印「天禄永昌」(Ⅰ―6)の方を先に賣り付けている)にも箱をつけ、箱に彩色をつけて文字を刻している。何れも同じ人の所蔵であつたが、二世蘭台がまだ生存中に求めたものである。古道具屋が背中に背負つて持ってきたので、どんなに大きな印かと思つた程の印であつた。この様な印は使用する必要はないけれども、床の間などに「飾りもの」として訪問客に見せて鑑賞させ、心では自慢していたのではないだろうか。印としての性質はなく、床の間に飾り、書画などと一緒にかざり眺めるものと想像される。木額は看板など多少実用性を持ったものもあるが、欄間なども刻し、また長野犀北館のような大きい欄間も刻している。

篆刻は、書や絵画に押す印、実用に使う認印、実印、図書に押す印、郵便物に使用する印、会社の社用印、公印など各々の印が有り、初世蘭台はその方面の印も刻している。三年位前に出版された印譜に、印の数は約五〇〇顆以上収録されているが、その一〇倍は刻しているのではないかと思う。刻する速度が早ければ数は多くなるけれども、初世は六〇歳で亡くなっているから、二世蘭台よりは多くはないだろう。今日で考へれば早死に近いから、残っている数からみて刻する速度は遅くはないと思う。旅などをして、今日と違い目的地に着くのは時間がかかり、不便だったから、仕事の時間は以外に少ないかもしれない。それだけ早く仕事を完成させたのかもしれない。初世蘭台が、

作品を作り始めてその印影が残っているのは、明治九二（八七六）年二一歳の印が最初である。それ以前の印は現在のところ見ない。最後の印影は大正元（一九二二）年のものが残っている。或ひは、それ以後も印を刻しているかもしれない。

初世蘭台は、篆刻ばかりでなく書も書いている。大正三二（一九一四）年に書いた金文風の条幅が残っている。絵画は残っていないが、描いているようだ。作品は大正一二（一九二三）年の関東大震災・大東亜戦争、その他の件で、大分消失したようである。現在、印影は印譜に残っているが、その印材は、残っているかどうかは不明である。今年（初世蘭台の生誕一四四年に当たる。一〇〇年以上経た作品は、なかなか残らないのではないだろうか）。

「書き印」（二）玄社本で「描き印」と表現したこの形式の条幅―変形の形式のものもある―は、墨や朱墨、或ひは彩色で篆書体を印の形で書いて、大きい印影を書く。それを半折位の紙の中に、五・六顆位書きちらして釈文を付してある。屏風形式のものもある。形は色々あり、彩色して床の間に飾れる様に仕立ててある。今回の展覧会にも出品されている（I―17）が、この書き印は大分残っている様である。初世蘭台の作品は評判が良いために書き印にも偽物が多く出廻っている。昭和の初めにも偽物があつた。また、二世蘭台が初世の病中に刻した印や額などがあり、それらは落款は初世蘭台になっている。印はその真偽は難しく、初世と二世との判別がなかなか困難な時がある。他の作家が蘭台を模刻しているから、その点、真偽はさらに難しくなっている。

初世の「雑記帳」の事を書いてみたいと思う。「雑記帳」とは、現在で云えばメモの様な物で、印材の鈕の形や、人形の絵の写し、臨書など、美濃紙を二折にした紙の少し厚くなって綴じているものである。この中の金魚のデッサン（I―27）と、それに基づいて作った金魚の印泥盒（I―26）を出品している。そのデッサンの袋には、「蘭臺先生雜抄」と西川寧先生が朱墨で書いている。金魚のデッサンと印泥盒で見ると、裏面には楷書で漢詩を刻している。この印泥盒を古道具屋が持ってきた時に父は大変喜んでた。

自用印は私の所には、余りなかったが、二世蘭台の時に古道具屋から買ひ求めたものがある。また、中に西川春洞先生の手持ちの小さい印を、寧先生から贈られたというものもある。二世蘭台がまだ若い頃、家には初世蘭台の印が無いと云ひ、西川先生から戴いた事であつた。その印は「乾惕（I―1）である。小さい変形の印で頭鈕に靈芝が刻してある。二世蘭台が亡くなって、先生に会うと、その印は有るかと思ふことがあつた。小印なので、多分有ると思ひますと答えた。その印も出品展覧されている。

二世中村蘭台秋

二世蘭台のことを述べて見よう。二世蘭台は初世蘭台の次子で明治二五（一八九二）年に生まれた。初世蘭台が大正四（一九一五）年に亡くなる迄は、学校は獨乙協会の中学校であつたが、父が亡くなってから中退、色々の希望は頓挫、やむなく初世蘭台の仕事に入つていった。しかしそれ以前に父より篆刻は教わつていたので苦しみもなく、仕事を続けたようである。ただし母や兄弟が多い為に生活苦は続いたという。また初世蘭台の弟子、先達の篆刻家たちには、苦しめられた様である。今日でも師と弟子の關係の件では、色々の噂などが表面に出てくると、妙になつてくる。しかし二世蘭台は、その様な關係になつても、その件を大きくする余裕がなかったのかもしれない。父親の死と、生活に追われた為だろう。

萬華鏡社の結社を昭和の初めに友人、知人と結成出来て、展覧会や雅会を開き、篆刻・工芸の一つの道を広げた。祖父と同じく木材を材料にして篆刻を始め、日用品の品を作つた。篆書体を木材の中に刻し入れて、静物（石榴・桃・蘭花などの絵画を刻し、一つの作品を作つた。この会は一五回位で、戦時中なので中止されたが、中村家には、この會員が遊びに来て、酒を呑んでは、絵画を描いたり、その当時の書道界、書壇、時局の話などをし、又将来の行末などを語り合つた様であつた。その当時、描いた絵画なども今日残つており、また旅を計画して旅先でも絵画を描いたりしていた。その絵をこの展覧会に出品している（II―42）。私もその旅に行つたことがある。それはまだ、大東亜戦争がひどくなる以前の話である。

二世蘭台は「蘭台」の下に「秋」の字を入れて、「蘭台秋」と号を持った。多分大正の終り頃と思う。「蘭台秋」は一生これを名乗つた。また二・三の別号は有つた様である。初世「蘭台」と作品が異なるのも自然の成りゆきであらう。

横山大観翁の印を刻したのは、昭和二二（一九二七）年で三五歳であつたから、若さの爲かこの頃、昭和一五（一九四〇）年頃まで約二〇顆位刻しており、印材は鶏血、田黄など良質の印材であつた。さらに戦争が終つて昭和三〇（一九五五）年頃まで續いて刻した。他に画家では、安田靉彦・奥村土牛・中村岳陵・伊東深水など。その後、東山魁夷・宇田荻邨、その当時の洋画家、東郷青児・中村研一など。他に工芸家の印も刻している。昭和二二（一九四六）年には村雲大機子の紹介で川合玉堂の印を約一〇數顆刻した。玉堂先生は当時、現皇太后陛下に絵を教授していた。その折、雅号を作成しその刻料として絵を描いて戴いたが、それも出品している（II―43）。書家關係では、西川春洞傘下

の影響で謙慎書道会に所属していたから、豊道春海一門の印、後には西川先生、青山杉雨先生一門下生の印を数多く刻している。特に豊道春海は大きい紙に大字を書いた為に大印が必要であった。約一・五cm四方の大きい印を三顆一組刻し、それより小さい印も刻している。何れも木印は得意なので刻したが、押すのが大変だったろう。豊道春海は書家と同時に僧籍だったから、有名な寺院に大きい字を書き、その額を二世蘭台が刻したため、その様な大印が必要だった。私は絵の具を額の文字にいれる位は手傳った。

先程書いた通り書道界には特別頒布を期限を決めて、雅印を安い刻料で刻し、他の作家が文句を入れた程に廉価で頒布した。初世蘭台にもこの様な頒布会を行なっていたのだらう。私も時々この頒布を行なっている。蘭台は印だけではなく、工芸品の印泥盒、簪・茶托・菓子鉢など実用性と篆刻を結びつけた工芸品を頒布した。初世蘭台は、まだ床の間に置いて、置物として考へての工芸であったが、二世の時代になると考へ方が違つてきて、実用性を加味した様であった。額など材料は主に桂材も刻し、表札・看板も刻した。印としては、実印・認印・会社印等を刻し、印判屋とおなじであるが、書体の字形、刻した字形が獨特で、特徴が有り、これが注文の方々に歓迎されたのではないかとと思う。印判屋と違い事務的に刻するのではなく、字形の創作、刀の切れ味の力強さなどを加味したから、刻料が安価であったこともあり、人気があり注文があつた。戦後であつたから、まだ篆刻を刻する人が少ないため需要があつたのかもしれない。

日本美術院「日展」に「書」が入会してから、二世蘭台は篆刻の審査員を務めた。この展覧会は陳列室の關係で、入選が少数になつた。旧い美術館は、地下に暗い室が有り、そこに陳列されたこともあつた。以前は官展であつたが、戦後は芸術院会員または参事等が日展を運営した。傳統があり、人気があり、現在でも「書」の応募数は多い。その審査員を何回か務め、作品は「老子語印」五〇顆を作成して出品していた。昭和三八（一九六二）年に「芸術院賞」を戴いた。「老子語印」の内の一顆、「和光同塵」（二・一六）の白文印であつた。この印は五〇顆の中でも大きい方で、石榴と鳥を配した立派な鈕の作品である。教科書に載る程であつた。「老子語印」は五〇顆で一セットになっており、今回はその内の一七顆が展観される。

平成七（一九九五）年の夏季展は、富岡美術館始まって以来の観覧者があつて賑わつた。美術館で宣伝されたこともあつたが、篆刻としては新しい表現をし、また木印を刻し印の鈕も美しいだけに、五〇顆一堂に集めての展観は人気があつたのだらう。その時

の図録は良かったが、カラーでなかったため少々現代的ではないが、二世蘭台の工芸品など、他の所蔵者の作品が出品されて多彩であつた。今回の図録はカラーになるというので、美しくなることと思う。前回展と同じ作品が出ることは御了承願いたい。

二世蘭台は、初世蘭台より現代的に篆刻表現を成したから、その力量は世間から認められた。二世蘭台は個展を三回、何れも日本橋三越を会場にして開催している。第一回は昭和六（一九三二）年三九歳の時に、初世蘭台一七回忌に当たり遺作展を開き、同時に個展を開いた。第二回は、昭和二五（一九五〇）年五八歳の時で、まだ若かつたせいか、酒のおひで会場に居たことを記憶している。若い時から酒は強く、酒ぐせは良い方ではなかつた。戦前戦後を通じて呑んでいた様で、晩酌は殆ど欠かさなかつた。しかし、体を悪くして昭和二六（一九五二）年か二七年頃に止め、その後は少し呑んだりしていた。タバコも好んで吸っていたが、これも止めた。そして、酒を止めてからは甘いものを喰べる様になつた。第三回の個展は七〇歳であつたが、この頃は酒は余り呑まなくなつたと記憶している。昭和四〇（一九六五）年七三歳の時に「老子語印」五〇顆は完成した。

昭和三八（一九六四）年一〇月、初世五〇年忌が真浄寺で催された。家に有る初世蘭台の作品や他の家からお借りした作品を室の一部に陳列した。法事が終ると約一五〇名の書家や篆刻家が集まり、石井雙石、豊道春海、西川寧、松丸東魚など、折詰と酒を呑み、色々な話をした。大印の印刷物が引出物になつた。二世蘭台は喜んで皆を接待していた。

昭和四一（一九六六）年七四歳、「老子語印」五〇顆を一部カラーで側款・印材・印影を載せた「中村蘭臺作品集」が三〇〇部限定私家版で発行された。この時、全部カラーで印刷をしたかったのであるが、予算の都合で出来なかつた。三〇年が経過した昨年、二玄社から立派な本が発行出来たのは嬉しく思う。上・下巻の上巻は、二世蘭台の若い頃より晩年の昭和四二（一九六七）年頃までの作品印影が載っている。下巻は「老子語印」である。鈕は立体的にカラーで写真が載っており、原寸より小さいけれども、大小の感じは良く分かり実物を認識出来る程の写真である。印影は原寸。側款も良く印刷されている。鈴印本は、この本の出版以前に私の弟子たちの熱心な押印で、平成五年に二〇〇部出来た。二世蘭台の弟子にも初め手傳を願つた。以前に二世蘭台が作成した印譜は、二二顆のみであつたが、今回は五〇顆全部を収め、然も朱肉・紙質も良く立派な出来となつた。

三代目の淳

三代目の私のことを書いてみようと思う。私は、二世蘭台一九歳の長子として大正一〇（一九二一）年六月二十六日に生まれた。私の名前は「淳」であるが、二世蘭台の友人、村雲大模子が付けた。六月は英語ではジュンだそうで、その当字で「淳」としたのではないだろうか。後世、書道界では私の「淳」を「淳ちゃん」と呼び、「淳さん」と呼んでくれることは親しくない人々だけであった。西川先生だけは「淳さん」と呼んでくれたが、他の大先輩は殆ど「淳ちゃん」であった。「淳ちゃん」と呼ぶほうが、呼びやすいのかもしれない。近ごろは「淳ちゃん」と呼ぶ方が亡くなり、主に「淳さん」になっている。書道辞典には「淳」と記しているのは普通で、「口」ではなく「日」になっているが、私はこの方「淳」が好きだが、活字には「淳」が通りが良いのかもしれない。雅号は無く、西川先生が私の一〇代の時に「小蘭」は如何？といわれたが、その雅号を戴くのが嫌だったので、そのままにしている。青山杉雨先生が晩年に、私に「蘭台」の名をなのれと云われたが、蘭台は重くて駄目だと断った。青山先生は会うたび云われた。今年七九歳だから、雅号の事については、必要なく「淳」で通す積もりである。本名と雅号が同名で良いと考へる。二〇年前に「淳ちゃん」と呼ばれたのが今は懐かしく思ふ。

私は小さいときから、病弱であった。幼年期に肺炎の様な病を起こしたのではないかと思はれる。したがって、中学校は聖学院に入ったが、二年の時に肋膜炎になり中途退学した。多分、肺結核が発病したのではないかと思う。この時代は、結核が多く、有名人でこの病気で亡くなっている方が多い。結核の闘病はまだ、結核菌を殺す抗生物質が日本には入ってなくて（まだ出来ていなかったのかもしれない）、発病しても風邪薬かビタミン剤位を呑んで安静にして、それが一時的に静まる位しか方法がなかった様である。大東亜戦争が始まる前であつたから、時代は急迫していた。西川先生、殿木春洋先生に書を習い始めたのはこの頃だった。殿木先生は、西川春洞先生の弟子であつて、漫画家であつた。謝花凡太郎というペンネームで漫画を出しており、篆刻が好きで、二世蘭台の所に時々顔を見せ、自分の書いた本を置いていった。昔の書道雑誌の編集者だった。今回出品した王翰の涼州詞の書（Ⅲ-64）は、昭和一五（一九四〇）年、私が一九歳の作である。西川先生の手本では、この詩は書いて戴かなかつたので、自分で書いたものと思はれる。西川先生は条幅の手本は書かれない方であるから、私も書いて戴いたことはない。多分、謙慎書道会に出品したのと思はれる。この楷書の干支は庚辰であるから、今年でちょうど六〇年になる。まだ二・三点有つたのだが、捨ててしまった。惜しいことをしたものであ

る。その他の書は、最近書いたものである。初世二世から見た場合、下手でみじめなものをご覧になれることになる。書はむづかしいが、書いている時は楽しい。

昭和一六年（一九四一）二月、大東亜戦争が勃発した。私は昭和一七（一九四二）年二月に出征、陸軍衛生二等兵として軍隊に入営した。日付がはつきりしているのは、二世蘭台の篆刻メモに「淳」の出征にあたり、認印「中村」を刻した記録が残っているからである。兵舎では軍隊の厳しい教練が行なわれ、私などは新兵なので、よく顔をたたかれた。一般の教練が終り陸軍病院で少し勤務した頃に、肺結核を再び患ひ、療養所に入れた。昭和一八（一九四三）年の四月頃だったか、これは不確実であるが、この頃に二世蘭台から篆刻を習い始めたのではないかと思う。昭和一九年には療養所を出て家に帰り、疎開先の東松山と東京を往復した。この間、戦争は激しくなり、東京等、各地は空襲に見まわれた。私の家は、東京の家も東松山の家も燃えなかった。昭和二〇（一九四五）年に終戦、それから食糧不足に見まわれた。ただ、東松山に疎開していたので、農家の方から作品を求められ、どうにか喰べられた。この五・六年については、日記は不完全だし、又その日記が見あたらないので、不確実でよく書けず、人生のもっとも大切な時期の所が不鮮明で申しわけなく思う。私自身も忘れており、困っている。書道界・篆刻界も混乱しており、兵隊さんが帰国する、日本全体が乱れている時である。私の青春は目茶苦茶であつたし、全国的に目茶苦茶であつた。私は疎開先から、埼玉秩父などに山登りをしたものである。また多分書や篆刻の勉強をしたと思ふ。テレビなどはないから、よくクラシック音楽を聴いていた。私の結核は、戦後一応抗生物質が出てきて、二年ばかり呑んで良くなり、体は快復した。

昭和二三（一九四八）年頃に日展が新設され、五科「書」として絵画・油絵と共に編まれ、二世蘭台は審査員に任じられた。私も出品したが、二・三回落選したのち昭和三一（一九五六）年には特選を戴いた。昭和三八（一九四三）年謙慎書道会は一八回展以後、戦争の為に展覧会が中止、終戦後の昭和二二（一九四七）年に展覧会を再開し、昭和二六（一九五一）年からは毎年開催された。他の団体、毎日書道展も開催された。色々な文化的展覧会が開催された。

昭和二三（一九五八）年頃に、古川悟さん、小笠栄次郎さん等に手伝ってもらい、荷物を取りまとめて、東松山の疎開先より引き上げ、東京に住んだ。私は昭和二二・三年頃には極く安い印の注文が有り、生活していた。印材は、朝鮮産の萬寶石という印材で、大きい印材を小さくきざんで刻していた。まだ二〇代後半だから印材を作るのには苦勞

しなかったが、今日考へると、身ぶるいする程労力で、固い印材を小さくするのは容易ではなかった。その当時、刻した印を見ると、印材の節約の為に印材の高さは二・三センチ位で、今日見ると惨めな印材であった。その印材のうち大きいものは今でも有る。篆刻家が少ない為か、安い刻料なので仕事は有った。仕事をしながら勉強が出来たのである。謙慎書道会では役員になり、又前に書いた様に日展では特選を戴き、私の頃には一回のみ特選を取れば依嘱に成る事になっていた。今日では二回特選を取らなければ、依嘱に成れないのですが…。

新潟大学芸能科書道科に保存している「鳴鶴印譜」を整理してくれと、当時の新潟大学の教授石橋犀水に云はれ、印の勉強になると思ひ、昭和三九（一九六四）年頃より高田の新潟大学分校に通ひ、当時の三浦教授と一緒に整理し、昭和四〇（一九六五）年に出版された。後に考へて見ると、大分違っている所が見つかった。然しこれを縁に新潟大学の非常勤で毎年一回出講する事になり、高田分校が新潟市に統合された後も、新潟に通った。二〇年以上通った様だ。その間に新潟にはたくさんの知人友人が出来た。相沢春洋とは父からの面識があり、昭和二七・八年頃よりお付き合いがあった。それに特選を戴いた年に直江津に行った時、相沢春洋は新潟市に旅をしていた時だったので合流し、佐渡へ一緒に行ったことが有る。それ以後、先生の疎開先の栃木へ毎年夏に行った。相沢春洋は、篆刻、硯など色々な方面を知っていたので勉強になった。

横浜国立大学教育学部へも約二〇年間、停年まで出講した。現在では広島島の安田女子大学でも非常勤講師を務め、現在も継続中。何れも学校で篆刻の実技を教へたが、篆刻の手ほどき位で終つてしまつて、それ以上篆刻家とは成り得ない。新潟大学の石野実さんが家に来た事があるだけであつた。弟子については、二世蘭台と同じで、弟子の養生には、上手ではなく、教へるには熱心で偶々積もりであつても、相手によつては、相手はわからない所もあるらしい。私は、篆刻は印稿原稿を修正するだけである。然も、全部修正するのではなく、一部分行うだけだから、相手はもつと良くする方法を考へてくれなければ完成しないわけだ。その兼ね合いがむづかしい。この頃はカルチャーセンターが出来てその教室にもいくが、やはり私の教え方は上手ではないようだ。二世蘭台と同じく、月謝は戴いたことはない。盆暮の挨拶位のものである。二世が月謝を戴かなかったのに、私が戴くわけにはいかない。弟子はやはり一〇名位しかいないだろう。その弟子と、二世蘭台の弟子が、鈴印本「老子語印」五〇顆の印譜を作製してくれたことは述べた。後に自用印印譜も作製した。また、二・三年前には私の印譜『邱淳印譜』(自

用印・小印と大印の印譜)何れも鈴印本であつた。どれも弟子たちが苦勞して押印したもので、特に老子語印五〇顆は大印なので、苦心慘愴した。

篆刻関係では謙慎展覧会で総務を務め、東北地方の篆刻は、東北書道会の故人になつた弟子の後藤青峯の長年の尽力を得て、会員を増やし謙慎展に出品。それに読売展も一七回展になつて盛んになり、出品している。小林斗盞先生が会長、私が副会長の全日本篆刻連盟展は一三回になった。全日本篆刻連盟は、それ以前に謙慎印会があり二〇回展以上実施していたが、全日本に合流した。いずれも盛んである。今日の様に篆刻が盛んになったのは、やはり先人が色々の考へを持つて弟子を養生、宣伝したことが実を結んだという一方、篆刻の面白さを認めた方々が多くなつた為かもしれない。それに西川先生、青山先生の大い力が有つたことも考へざるを得ない。

平成二（一九九〇）年に長野犀北館で「長野市における中村蘭台（初世・二世）展」が開催された。長野市は、初世二世関係の深い土地である。私にとつても、新潟大学の学生が卒業してから高校の教員になっており、時々行く所で、講義や遊びに行った馴染み深い所である。

はつきりした記憶がないのだが、真浄寺（私の寺）で、榴社の会合勉強会、模刻や篆刻を刻して行くを二世がまだ生存中から行なつていたが、昭和四四（一九六九）年二世蘭台が亡くなつた後も石野さんや、佐々木洋石さん等が幹事になり集合した。この会は、昭和四五（一九七〇）年頃まで行なつていたかもしれない。その後、榴社の展覧会を四回開催、今年五月には、東北地方、カルチャーセンターの人々、私の弟子をも含めて、一二〇名余りの篆刻展を開催した。ケースを借りて、二世蘭台の「老子語印五〇顆」を展覧して、多くの観客に見て戴いた。壁面に飾つた私たちの作品より、老子語印五〇顆を鑑賞した方のほうが多かつた様に思うが仕方がない。やはり私たちの作品を見るより、「老子語印」を眺める人の多いのは当然であろう。眺めている人の中に「こんな茶色の石の印材があるのか」と問はれた人が居たのには驚いた。この印材が木の印材とは気が付かなかつた様だ。篆刻は石の印材で刻するものと思つている人が多い。木材で刻する人も居る事は知らなかつたようである。

篆刻家が三代続くのは余り居ない。記録としては二組ばかり居た様な記憶になつて居て、私の所で三組目かもしれない。



図 版



凡例

- 一、この図録に収録した図版は、平成一二年度 夏季展（初世中村蘭台・二世蘭台・淳一三代の篆刻一）の出品作品であり、すべて個人蔵である。
- 一、作品No.のIは初世蘭台、IIは二世蘭台、IIIは淳をあらわす。
- 一、作品No.と展示の順序とは必ずしも一致しない。
- 一、作品目録の法量の単位はcmとする。印章は印材の大きさをあらわし、印面の縦×横・高さ、書画は本紙の縦×横、扇面は縦×最大横巾を示す。
- 一、作品目録に制作年が明記されていない作品は、制作年が特定できないものである。
- 一、印影は所蔵者のご意向により原寸大としていない。
- 一、初世蘭台の制作年令は、当時の慣習に鑑み数え年とした。
- 一、二世蘭台の制作年令は、本人が誕生日前にその年の満年令を側款に誌している例にない、一月一日をもつて満年令とした。また淳の制作年令もそれにならった。
- 一、初世蘭台の書画の作品名は、西川寧「蘭台先生の雑抄 蘭臺」（『書品』一六八号）を参考にさせていただいた。
- 一、◇はそれぞれ自刻の鈕を示す。
- 一、この図録の編集は白取幸子が担当した。

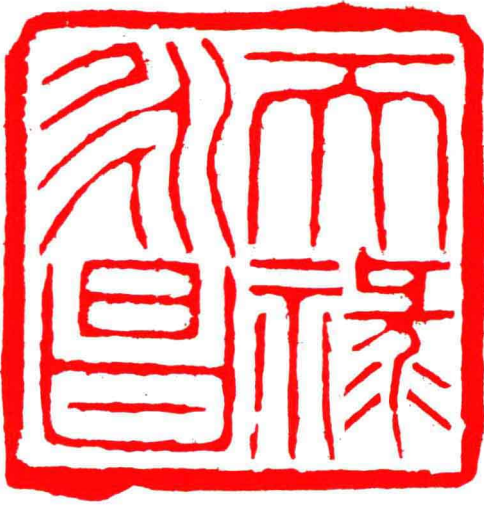
初世中村蘭台

I-6 神龜鈕「天禄永昌」



二世中村蘭台

II-16 榴子鈕「和光同塵」 老子語印

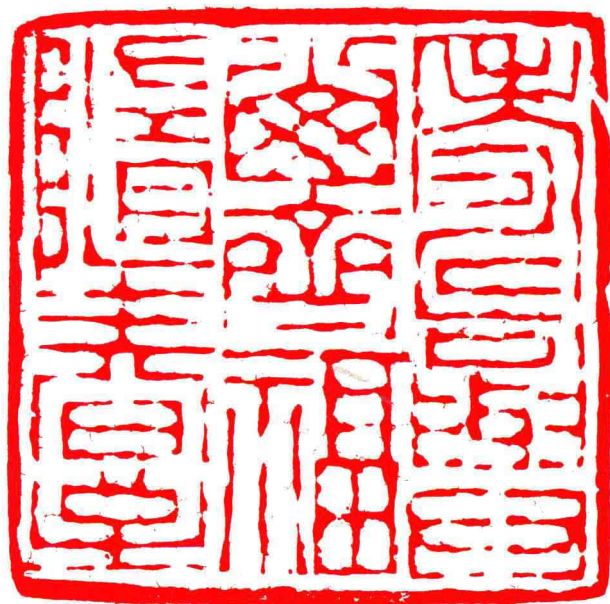




中村
淳

III-7
博文鈕「千聖不傳」

I-7
辺款鈕「壽與山齊福隨春至」





I-4

I-3

I-2

I-1



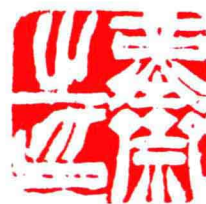
I-3
「金粟如来」



I-1
靈芝鈕「乾惕」



I-4
「寄身於從容無諍之境」



I-2
水牛鈕「葦齋之印」



I-10

I-9

I-8

I-5



I-10

両面印「郵稻吉印」・「香艸居主」



I-9

紐鈕「金石癖」



I-5

「注神馳想」



I-8

住址印「下野足利長谷川金蔵電話三〇五」



I-13

I-12

I-11



I-13
壇鈕「蘭臺石室」



I-12
金文鈕「舒卷」



I-11
「笛川生」